

第1回三次市行財政改革推進審議委員会意見要旨

【1. 三次市はどうありたいか】

(魅力ある市)

- 西中国山地の中核拠点になる地理的条件はあるが、「魅力ある市」でなければ住民&企業がこれまで以上の速度で沿岸部に逃げていく。
- 「魅力ある市」を更に継続的にステップアップするには、住民&企業にとって「安心」の追求が必要。「安心」を追求することで、三次市の特徴が鮮明になる。その活動を通じて、観光業、農業、商業、工業での特徴を出していく。

(商業・観光的な便利さ、集客力)

- わざわざ広島市や福山市に行かなくてもよい大規模店舗が、生活のしやすさが向上のためには必要。これも「安心」につながる。
- 三次市が拠点性を発揮するには、大規模店（コストコ、百貨店）があってもいい。中核都市として集客できると思う。
- 西中国の拠点として車で来場者を呼び込める「めだま」になるもの⇒野菜などの直売所・食事ができる施設、買い物の商業施設（衣服・ブランドの靴、スポーツショップ等のアウトレット。）倉敷や兵庫県等のように「魅力」をどう発信するか？結婚した子育て世代はどこに買い物に？
- レジャーは作木のカヌー、平田観光農園、農家民泊は？
- みよしの景色はとても素晴らしいと思う。その良さをたくさんの人に知ってもらうために、たとえばワイナリーをゴールにしたマラソン大会とかのようにしっかりその土地を体験してもらえるものを。土地柄とか応援のありがたさなど感じてもらいたい。三次にはたくさんの橋や土手、山もあるし、ランナーは気持ちいいのでは。
- 三次の強みは、拠点性。その拠点性を生かし、観光、特産、JAらが取組を展開するほか、いろんな工夫をした起業も大切。行政はもっと支援できないか。
- 子どものころの三次町は立派な街であった。今は廃屋と駐車場が多く、新しいものができていない。

(仕事)

- 後継ぎになる子どもが帰る受け皿としての「仕事」。結婚・子育て・教育とつなぐために必要なものは？ Uターン I ターンキャンペーン
- いろいろなアイデアを出し、自ら新たな起業や皆に呼びかけを行い六次産品化などにも取り組んだ。
- 農業者・商業者等が連携して、三次一丸となって外貨を獲得し、市内で循環する仕組みが必要。
- 県北地域に湧永製菓のレベルの会社があることはすごい。
- 三次市に大企業を。働く場所がないと人は増えない。住む場所も必要。空き家の有効活用（家賃はかなり安く）や子供医療費無料など三次だけのメリットで若い世代も住みやすいと実感するのでは。あたたかく見守ってくれる年配の方々、お互いを知って理解し合える方々がたくさんいるこの三次で、心豊かな

子どもたちがいっぱいいることを願う。

(インフラ拠点整備)

- 三次の玄関である駅の工事は早急に。交通、流通が変化する。
- 三次駅周辺整備での収益見込みは？公共交通の整備，くるりんバスの活用。
- **JR** 三次駅は，三次市の玄関なのに利用等してみてとても淋しく感じる。お土産や名産品（ピオーネはどこに行けばあるかなど）が置いていない。駅には三次を **PR** するものがない。三次の顔であるならばもっと充実すべきでないか。
- **JR** 電化，複線化したら町が開けると思うが難しいようだ。
- 三次の顔は市役所，駅，ワイナリー？
- 松江尾道道は三次にも大きな変化をもたらしてくれるだろうが，それも今だけで，三次は，松江、尾道への通過道もしくは単なる中継地になるのでは。三次という地名を入れる工夫はないか，やまなみラインとか。
- 便利の中の不便さがある。尾道松江道の開通により，バスの路線等が減り，バス停が遠くなり，高齢者が多くなった市民には通院がしづらくなった。交流人口の拡大や地域活性化など喜ぶべきことばかりではない。

(生活環境)

- 住み心地は，30年三次に住んでいるので，ここしか考えられない。
- 三次市は「高齢者が住みよい街」第2位（東洋経済・住みよさランキング）。高齢者には，子育てしてきた自負があり，何でもかんでもめぐんでほしいとは思っていない。
- 歴史と文化を魅力的に展開するだけで活性化するのか，空き家・空き店舗の活用だけでなく，若者も高齢者も住みやすい集合住宅の建設も。職・住一体の新商店街を形成すれば人も増え、物も動き三次町にも賑わいを取り戻すことができるのでは。

(子育て，教育，地域)

- 子どもの育児について不安を感じていたが，地域社会においてコミュニケーションが不足していると思うので，自分は，祖父母と同居しているため，学ぶことが多い。核家族の人でも高齢者と交流できるまちづくりを市役所に期待する。
- 親が「もったいない」「我慢すべき」などもっと教育すべきだと思う。
- 地域の姿（隣近所の関係等）としての理想は，極論を言えば昭和30年代の姿に戻ることであると思う。
- 「地域の良さ」を住民の拠り所（パワースポット）にしていきたい。
- 子どもの存在が大事。子どもが中心となって，コミュニケーションが広がっていく。
- 地域貢献は、義務教育のように必ずやらないといけないと思っているが、背負いすぎて、やらされるのは息がつまるし、しんどい。私たちは、楽しく地域貢献をやって明るい地域をつくっていこうと思っている。
「地域とは先祖から受け継ぎ、子孫から借りている宝」この不変の原則を理解し、やらされているのではなく、私たちの存在理由のひとつ、義務としてやっている。せつかくなら、いやいややるより、仲間と楽しくやったほうがストレスがない。できない理由を考えるよりどうやったら出来るか。いやいややっていると、それを子どもたちが見たら子どもたちはしんどいんだと感じ取ってしまう。大人が楽し

くやっていると、これって楽しいんだと思ってもらえるかもしれない。子供たちには、大人の権利を振りかざし、帰って来い！と脅すのではなく、「帰って来たい！ここの役に立ちたい！」と思ってもらえるよう子どもたちと勝負しながら楽しくやっている。

【2. 市役所はどうありたいか】

(市役所自体の課題)

- 市役所には、民間のようなスピーディーな動きが必要。親方日の丸ではだめ。
- 行財政改革を経費節減目的での考え方で推進することは、如何なものか。サービスの低下をどの程度で抑え、それをどこでどのように補うかの検討が重要。
- 三次市の固有の財産(自然・文化・歴史・特産品)等の共有化をレベルアップし三次市が元気になる仕組み作り
 - ・支所は地元根を下ろし(地域を知り尽くした行政マン)
 - ・本庁はそれを纏める機能の確立を(地域を売り出す行政マン)
 - ・シニア世代のサポート・活用(嘱託)
- 住民の拠り所となる機能(プラットホームづくり)
 - ・住民との接点の機会を積極的に図る。その為にもプラットホーム機能を備えることが必要。

(行革の方向)

- 行政コストの削減だけでなく、もっと明るい話がないのか。
- 当社も構造改革などに取り組み、魅力ある商品を生み出してきた。魅力ある商品がないと収入が増えない。
- 下げるものはどんどん下げ、コスト削減と収入増の取組の両方が必要。重複する仕事はやめるよう部門間で話し合い、定時退社を促進して自分の生活を楽しむ方向に進めている。
- 10年先が見えない状況で行革をどのように提言すべきか、整理できていない。現場の課題、社会の課題等を考えていく。
- 市役所には、過去と現在の検討(破壊)と発展する未来を考える(創造)ことを期待。三次市を夢の持てる地域にしたいと願う住民は大勢いる。
- 行政が存在しなくても、地域には住民が住んでいる。行政の基本は、「地域に住民を住まわせる」ことで、そのために何をどうするかを考えることが出発。
- 改めて、改革の基本理念を読んだ。限られた資源を有効に活用し意味の無い「削減」ではなく、地域の発展を実現するためにがんばっていきたいと思う。次回の会議では、今回の協議会が、理念にのっとって、どう活動していくのかを大枠で示す必要があるかなと思った。あまりにすばらしい理念なので、ぜひ、向かっていきたいと思う。

(行政としての検討課題)

- ① 尾道松江道の全線開通後の姿を描くことの重要性？
- ② 行政マンの係る費用対効果(退職不補充等による)をどう分析するのか？
- ③ 膨大な地形の維持と、人口減少との接点・連動課題を模索しながらの財政改革の視点は？ (荒廃する土地の維持)+(歯止めの効能がない人口減少)

(地域、住民との関係や対応)

- 行政には起業者への応援を期待する。起業の際に、ネガティブな批判としての「採点」をされて凹んだ経験がある。
- 行革が人件費削減がメインとなっているが、地域とのかかわりがどうなっているか。市職員も地域に出なくなった。地域が分かっていない状況で行革を進めていくことに懸念がある。
- 市役所の職員が地元を知らないっていう話があった。職場である地元への愛はあるでしょうけど～それが伝わりにくいのは忙しさかもしれない。たとえば市の広報などにオンリーワンの企業を宣伝したり、面白い景色や行事などを職員が推薦したりしても面白いのでは。(NPOとかがやれば面白いかも)
- 地元には、自然や文化など自慢できる地域資源がある。自慢できるものはきちんと共有して、どんどん発信していくべきと思う。市職員にももっと地域の良さを知ってほしい。
- 以前、民間企業の知り合いの人から小学校か教育施設へ本の寄贈をしたいと相談を受け三次市教育委員会に話に行ったが一部の会社から寄贈は難しいということで上手くいかなかった。会社の名前は出さなくてもよいと言ったのだが。後味が悪く、もう公への寄贈の話はしたくなくなった。こういう時にNPOなどに相談していればもっといい場所を紹介してもらえたかと思った。
- 廿日市の例のように行政と住民の間にNPOのようなつなぎの団体の必要を強く感じた。新たに起業したい方へも、行政ではできないことがあるでしょう(異業種との交流など) 県外から住みたい人に、どういうサービスがあってどこに古民家があるのかなど細かい情報がほしい。いきなり市役所に行ってもどの窓口に行ったらいいものかたじろぐ。
- 支所について、人員削減は仕方ないと思うが、支所の職員は市と地域の人を繋ぐ大きな役目も担っている。地域の市職員が本庁へ勤務するのは当然のことだと思うが、他地域の市職員が他地域の支所へ勤務をすることは、三次市にとって不利益に働いておることのほうが大きいと思う。支所地域に住んでいる人は、やはり行政の人を頼りにしている。職員が減って、かつ町外の知らない職員が増えてる事への不満はあると聞いている。地域愛ある職員さんに居てほしいと思っている。地域愛はやはり自分の住んでる地域、携わってきた地域だと思う。
- トラウマがあって、本庁の職員さんには相談しにくい。

(地域、住民組織)

- 市役所は、市民等に対して何もかも与えないようにしてほしい。(やりっぱなしが多い。)
- 自治連合組織は三次市の下請けではなく住民の代表組織。市議会議員は地域で選んではいない。今年度予算で自治連合組織への交付金が一方的に削減され失望した。住民組織が三次市の協働のまちづくりの中で重要な団体だと言っても口先だけと思われても仕方ない。
- 行政のスリム化は必要だが、住民自治組織へのお願いが多すぎることは課題である。
- 合併して10年経過したが、旧町村は地元意識が未だに強い。地域間交流やサ

ポートをどんどんしていくべきだ。